

アジア系ムスリム就労者のストレス対処

——バングラデシュ・パキスタン・イラン出身男性を対象に——

教育心理学コース 井 上 晶 子

Stress coping of Asian Muslim Workers

——Focusing upon Bangladeshi, Pakistani and Iranian Male Workers——

Akiko Inoue

The number of foreign workers in Japan has been on increase since latter half of 1980's. However, there has been only few studies, which describes foreign workers from psychological point of view.

This study focuses on the stress coping of foreign workers by using semi-structural interview. 64 workers from Bangladesh, Pakistan and Iran participated in the interview.

12 stress areas and 6 different coping strategies were found. Motivation of migration and the length of stay affected their stress coping process. There was tendency that maintaining stable identity became at risk when participants continued to stay in Japan under unstable socio-economical condition with great cultural differences between Japan and their home countries.

目 次

- I 序章
 - A 問題と目的
 - B 本研究の理論的位置づけ
- II 研究方法
 - A 調査対象
 - B 調査手続き
- III 結果と考察
 - A 来日動機
 - B ストレス対処
 - 1. ストレッサー領域
 - 2. 対処方略
 - C 滞在形態による比較分析
 - 1. Mさん（出稼ぎ型・短期滞在者）
 - 2. Hさん（進路模索型・短期滞在者）
 - 3. Nさん（出稼ぎ型・長期滞在者）
 - 4. Aさん（進路模索型・長期滞在者）
 - D まとめと考察
- IV 今後の課題

I 序章

A 問題と目的

1980年代半ば以降、好景気で労働力不足の日本に「外国人労働者」¹⁾と称される人々の来日が激増した。多くはビザの期限後も滞在を続ける「超過滞在者」、又は無資格で就労する「不法就労者」であり、社会問題となったが、その後の日本経済の後退と取り締まり強化の中で、新規来日者は減少しつつある²⁾。しかしながら、就労者の全体数は26, 7万人前後で大きな減少が見られず、90年前後の好景気に既に来日していた人々の多くが、現在も滞在を続けていると考えられる。

この中には、徐々に日本社会で生活の基盤を築き始めた人々が見られ、あるいは日本人との結婚なども増加しており、日本への「定住化」傾向が指摘されている（駒井, 1995）。こうした状況の中で、外国人就労者をめぐる問題は、政治経済的、社会的なものにとどまらず、より個人の内的、心理的な問題へと視点を移す時期に来ていえる（井上, 1998）。

しかしながら、実際には心理的な観点から外国人就労者を捉える研究は、精神科領域からの数例（杉山・大西ら1992, 1995）を除くと、殆ど見られない。彼等の内的

世界が取り上げられることは殆どなく、外的に付与されたイメージが実態のないまま一人歩きしていると言える。

本研究の目的は、こうした状況の中で、外国人就労者を彼等の視点から描き出すことにある。対象者は特にバングラデシュ、パキスタン、イラン出身³⁾のイスラム教を信仰する男性に絞った。それは、この地域からの出身者が、80年代後半以降に急激に増加し、その後定住化の傾向が顕著に見られるためである(駒井, 1995)。また、三国出身者の就労者の日本における社会経済的地位は共通する点が多く、さらにイスラム教という文化的特性を共有しており、文化が与える影響を検討することが可能であると考えた。

B 本研究の理論的位置づけ

心理学では異文化接触下の人間を「異文化適応」という枠組みで捉えてきた。斎藤(1996)は、「個人が新しい環境との間に調和的で均衡が取れた関係を築き、緊張やストレスにさらされていない状態にあること、あるいはそれを目指す過程」として、異文化適応を定義している。この適応に至る過程や、その結果には集団差や個人差が見られ、心理学的研究の主眼は、そうした差異を生み出す要因の解明、適応状態の予測におかれてきたと言える。これまでに、性別、年齢、性格傾向、学歴、滞在期間、言語能力、滞在目的、受け入れ国の体制、社会経済的地位、ソーシャルサポートの量、文化の類似度、接触文化に関する知識の保有量等が影響要因として検証されてきた(Church, 1982 Furnham & Bochner, 1986 Bochner, 1982 Berry, 1990, 1997 Ward & Searle, 1991, Ward & Kennedy, 1993など)。その中でも、どのような形態の異文化接触であるか、つまり接触動機や滞在目的とその永続性(一時滞在/永住)とが、重要な要因とされる。自発的な動機による接触のほうが、その後の適応状態は良好であると言われ、例えば移住を強制される難民や、夫の海外勤務に同伴する妻などのほうが適応に困難を感じやすいことが指摘されている(野田, 1994)。さらに、Berry(1990, 1997)は、永住者が新しい社会へコミットしていく途中、新しい社会の「参加者」であるのに対して、留学生やビジネスマンなどはその社会に一時的に滞在している「訪問者」「観察者」に過ぎず、両者に見られるこうした滞在に対する意識の違いが異文化接触下における経験や反応の差を生むと述べている。

国内で行われる心理学的異文化接触研究の多くは、一時滞在中である留学生を対象としたものであるが、一時滞在中の異文化適応は、「文化学習モデル」(Bochner,

1982)の枠組みで理解される場合が多い。異文化接触状況は多くの学習課題に直面した状態と捉えられ、新しい社会における文化的知識や社会的スキル、言語を学習することによって適応が可能であるとする見方である。学習を促進するためのソーシャルサポートが得られることを重視する研究もみられる(Ward, 1997 田中・藤原, 1992など)。一時的滞在中者にとっては、新しい社会との関係をうまく保ちながら、勉強や仕事といった滞在目的を達成するために、効率的に機能することが個人々の課題となると考えられる。

一方、移民や難民などの定住者にとっては、滞在長期化に伴って新たな課題が生じると言われる。精神科医の秋山(1998)は、在日外国人患者を治療した経験から、来日3、4年ぐらいまでの期間に見られる心理的問題は、外部環境の変化への認知的適合が求められるような、普遍性の高いものが多いのに対して、滞在4、5年目を境に個別性の高い、文化的アイデンティティの変化を伴うような問題へと変化すると論じている。文化的アイデンティティの定義は、研究者によって様々であるが、一般的には「自分自身がある文化に所属しているという感覚、あるいは意識」(鈴木, 1997)とされ、社会的アイデンティティの一側面であると捉えられる。

滞在が長期に及ぶにつれ、新たな社会の一員として生活をするようになると、新たな文化の中に自己を位置づけつつ、さらに出身文化との間にも葛藤が生じないような安定した文化的アイデンティティを構築することが重要となると言える。

このように、どのような目的をもって、どのぐらいの期間異文化に留まるのかによって、「適応」の意味するところは異なると言える。さらに、この「適応」は、出身社会と新たな接触社会の社会的、文化的差異が大きい程、困難になることも指摘されている(Ward, 1997)。

つまり、異文化での経験の理解には、それがいかなる文脈において起こっているのかを考慮し、その文脈の中で理解することが必須であると言える。

しかしながら、日本における外国人就労者の場合、この文脈は非常に複雑・不明瞭な点が多い。社会経済的位置づけは不安定であり、滞在10年を越え、事実上「定住」状態にあっても、滞在資格がなければ明日には強制送還される可能性がある。また、特に独身・高学歴を特色とする上記三国の就労者には、出稼ぎを目的としない者が含まれていることがこれまでも指摘されており(三宅・長谷, 1993来日外国人との共生社会研究, 1994駒井, 1991, 1995ら)、来日動機についても明らかでない点が多い。これに加え、イスラム教徒という文化的特

性を持った集団が、国内で研究対象とされた例もない。従って、まず必要なのは対象者がいかなる文脈におかれているのかを明らかにし、さらにその文脈において、対象者自身が目指す「適応」がいかなる状態であるのかを探索することであろう。

本研究では、あらかじめ「適応」状態を想定することなく、個々人の内的世界を捉えることが可能な枠組みとして、「心理的ストレス」(Lazarus & Folkman, 1984)を用いた。「心理的ストレス」の概念においては、個々人がある事柄が自分の適応資源の限界を越えたと評価する場合に「ストレス」が生じ、それに対して、様々な認知的努力と行動上の努力である「対処方略」を取って解決をはかるとする「対処」というプロセスが生じると捉えられる。

つまり、ある事柄がストレスとなるか否かは、それを評価する個人の能力・価値観等に媒介されて決定されるため、個々人が日本での生活で何を重視しているのか、どのような「適応」を目指すのかが反映されると言える。従って、本研究においては、困難な状況や事柄を「ストレスサー」、適応を「対処」、適応のため用いられる方法を「対処方略」として捉え、対象者の心理状況を探索することにする。研究の主眼は、どのような事柄がストレスとなっており、それにどのように対処しているのかという、内容の質的分析にあり、実際に受けているストレスの量やその結果としての適応—不適応については扱わない。

II 研究方法

A 調査対象

筆者がボランティアで活動に関わっている外国人援助団体¹⁾と都内のイスラム教モスクで直接協力を依頼、さらに次々に友人を紹介してもらって雪達磨式サンプリング(片桐, 1997)によって面接参加者を募った。対象者は、1986年から1998年の間に来日し、現在日本で就労するバングラデシュ人36名・パキスタン人20名・イラン人8名の計64名、平均滞在期間は88.3ヶ月(S.D. = 41.6)、平均年齢は33.0歳(S.D. = 5.4)である。全員男性で、そのうち8名は来日後日本人女性と結婚しており、7名は就労資格を有し、それ以外は滞在資格を持たない。本国で、単科大学・大学以上に在学経験のある者(中退を含む)48名、高等学校卒業10名、小学校のみ卒業1名、不明5名であった²⁾。

B 調査手続き

調査方法として、半構造面接を用いた。半構造面接は、厳密に設定された面接スケジュールを必要とはせず、面接項目は面接をガイドする役割を担う指針のようなものといえる(箕浦, 1984 Smith, & Langenhove, 1995)。従って、対象者の応答に沿って質問項目を変化させていくことができ、探索的研究には適した方法であると言える。全対象者に対して、来日の動機と現在の生活状況、現在どのような事柄を困難であると感じているか、それにどのように対処しているかを尋ねた。

面接における使用言語は、言語の異なる人を研究対象とする場合に、重要な意味をもち、母国語の使用が最も好ましいと言われる(Brislin, 1986)。本研究においては、英語・日本語・母国語(ベンガル語・ウルドゥ語・ペルシャ語)の3つの中から使用言語を選択してもらい、日本語と英語の場合は筆者が、母国語の場合はボランティアスタッフの同国人に通訳をお願いして、可能な限り対象者の自由な表現が保証されるように心がけた。実際には、主に日本語を使用した者49名(平均滞在月数99.8ヶ月)、主に英語使用者10名(平均滞在月数32.3ヶ月)、日本語と英語併用者4名(平均滞在月数74.5ヶ月)、通訳を介した母国語使用者1名(滞在年数32ヶ月)であった。

面接は、①都内の外国人援助団体の事務所の一室、②都内のイスラム教モスクの一室、③被面接者の自宅で1998年5月～1998年11月の間に実施した。一人当たりの面接時間は、30分～3時間であり、話しが飽和(Glaser, & Strauss, 1967)したと感じた時点で終了とした。プライバシー保持とデータの公表の仕方について説明をしたのち、了承の得られた62名の面接はテープ録音した。了承の得られなかった2名は記録を取りながらの面接となった。

III 結果と考察

A 来日動機

まず、異文化での経験を大きく作用する要因の一つである来日の動機について明らかにする。大別すると、経済的色合いの濃い動機と、経済的理由よりも、来日によってもたらされる就学、就業の機会の増加のほうに主なる動機となっているものが見られた。ここでは前者の動機を持って来日した人を「出稼ぎ型」、後者を「進路模索型」と称し、今後の分析に用いることにする。尚、日本人と結婚している8名は、現在の生活状況が他のものと大きく異なっていたため、本論では、それ以外の56

出 稼 ぎ 型	進 路 模 索 型
「家族を養うため」「子どもに教育を受けさせるため」など、現在の母国の経済的ニーズがプッシュ要因。貨幣価値の高い日本でお金を稼ぎ家族の経済を支えることが目的。来日後は、母国への送金に重点を置いた、経済的な効率重視の生活を送る。そもそも、日本での就労行為が未許可であることを承知した上での来日が多い。	母国への送金などの必要性はない。「日本に行けば何かできるのではないか」という来日への強い期待がある。技術・知識習得・就業機会の模索・会社設立の資金調達、など将来の機会模索・獲得が目的。「国にはチャンスがない」「外国で頑張ろうと思った」等の、母国における職業機会、進学機会の狭さへの不満がプッシュ要因の一つ。来日当時に未許可で就労する意志のあった者は殆どおらず、多くは就学生として、あるいは観光、商用などの短期滞在者として来日し、その後多くは希望した進路に進めなかったり、予定外に滞在が長引き、現在に至る。

表1 来日動機

名を分析対象とする。56名中、「出稼ぎ型」は16名、「進路模索型」は40名であり、それぞれの特徴は表1に示す通りである。

B ストレス対処

1. ストレッサー領域

ストレッサーは、表2に示す12領域に分類された。分類に際しては、その基準や領域につける名前を、臨床心理学を専攻とする大学院生3名と検討した。別の大学院生2名と筆者、計3名で行った分類の一致度は87%であった。

「言語関連領域」では、言語スキル不足を原因とする、日本人とのコミュニケーションの困難さ、買物や電車に乗る・情報を得るなどの日常生活の困難さ、職場な

どでの不都合さ、が見られる。「文化様式領域」では、日本において、対象三国の文化、特にイスラム教に関する理解が乏しいこと、文化的な規範・価値観が大きく違い文化的距離が広いことなどもあり、飲酒の習慣、男女役割、若い男女の付き合い方、家族関係のあり方、イスラム教の習慣の無理解、などが挙げられた。「人間関係領域」は、友人関係や信頼関係形成の困難さが挙げられた。それぞれの文化は特有の対人関係ルールを有し、人間はそのルールを成長する過程で身につけていくものであると言われている(箕浦, 1984)。対象者の殆どは成人後に来日しているため、「日本人は口と心が違う」というように、日本式の対人関係ルールに接した際の戸惑い・葛藤が見られた。

全体の8割は、単身の来日であったため、「家族分離領域」は多くの人々に困難を感じさせていた。対象三国では、家族の結びつきが強く、兄弟や両親を含む大家族で生活を営んでいる場合が多く、単身来日によって生活は大きく変化する。「超過滞在者」の場合は一度日本を離れると再入国がむずかしく、一時帰国ができず家族との分離は特に長期化する。さらに、「偏見差別領域」においては、日本社会におけるアジア人蔑視、メディアによって付与された画一的な「外人」「労働者」「犯罪者」イメージに基づくステレオタイプ的な見方、差別的な扱いを日常場面で受けることなどが挙げられた。また、「能力発揮領域」では、能力に見合った仕事をする機会が与えられないことや、能力を正当に評価されないこと、などがストレッサーとしてあげられた。対象者の多くは母国では比較的高学歴であることから、日本で従事可能な仕事と自分の能力評価の間には大きなギャップが生まれると思われる。

1	言語力不足と言語を用いる活動領域	[言語]
2	家族との分離に関する領域	[家族分離]
3	生活習慣・文化様式に関する領域	[文化様式]
4	人間関係に関する領域	[人間関係]
5	偏見・差別経験に関する領域	[偏見差別]
6	能力発揮と評価に関する領域	[能力発揮]
7	不明瞭な目標・将来計画に関する領域	[目標将来計画]
8	所属感に関する領域	[所属感]
9	ビザ上の制約に関する領域	[ビザ制度]
10	結婚に関する領域	[結婚]
11	労働環境に関する領域	[労働環境]
12	経済状況に関する領域	[経済状況]

表2 ストレッサー領域

「目標将来計画領域」では、日本で生活する上での目標のなさ、充実感のなさ、今後の見通しのなさなどが語られた。また、日本で生活しているのにいつまでも「外国人」として受け入れてもらえない、あるいは母国への再適応に不安を抱えている、といったように、「所属感領域」におけるストレスが見られた。「ビザ関連領域」では、滞在資格を持たないことによって生活上の制約が生じることなどがストレスとしてあげられた。欧米諸国では長期滞在している超過滞在外国人に対し滞在資格を与えた歴史的経緯があるため、「日本でもいつかは」という期待と、「日本だけ何故駄目」という失望が対象者には生じていた。

さらに、対象者が30歳前半の独身男性を中心に構成されていたことに関連して、「結婚」が未達成のライフイベントとして意識化されていた。従って、母国での結婚を希望する人にとっては、「早く帰国しなくては」という焦り、帰国の意志が弱い人にとっては、「相応しい日本人女性と巡り合えない」という悩みを生じさせ、「結婚領域」におけるストレスとなっていた。

対象者の就労先は、一部を除き、中小零細企業における、いわゆる3K（キタナイ、キケン、キツイ）労働である。朝早くからの仕事、休憩のない仕事、夜勤、重労働、など日本人が敬遠する条件の悪い仕事に対する不満や、労働条件が日本人と外国人では異なること、などが「労働環境領域」のストレスとしてあげられた。特に昨今の日本の経済状況の悪化で、仕事を簡単に探せなくなっていることから、条件が悪くても簡単に仕事をやめられない、解雇される不安があるなどが挙げられた。雇用の不安定さは、さらに経済的な不安定をうんでおり、母国の家族の経済状況の悪化や、日本の物価高など、「経済的領域」は多くの対象者にとって、母国と自らの生活に直結した重要な問題であるといえる。

2. 対処方略

対処方略として、ストレスと同様の手順で分類したところ表3に示す6つが得られた。分類者間の一致度は86%であった。

まず「ソーシャルサポートの利用」が見られ、サポート源として最も利用されていたのは、同国人であった。これまでも指摘されてきたように、異文化での生活において、同国人との接触がストレス緩和に果たす役割の重要性がうかがえた（Smith, 1985 Short & Johnston, 1997, 木村, 1997ら）。日本語習得の補助や、生活に関する情報の提供などの実際的なサポートから、ホームシックなどを紛らわせるための情緒的なサポートまで、

1	ソーシャルサポートの利用
2	状況の意味付け
3	時間的制限設定
4	最重要目標へのコミットメント強化
5	状況について考えない
6	宗教的価値基準の利用

表3 対処方略

様々な場面で同国人からのサポートが機能していた。来日間もない時や、滞在資格を持たない場合などは、同国人が唯一利用可能なサポート源となることもあり、その重要性は増すといえる。

さらに対象者に見られたのは、環境に働きかけて状況を変化させるのではなく、ストレスを生む状況の捉えかた、意味付けを変えようとする認知的工夫によるストレス対処であった。この背景には、対象者の社会経済的位置づけが不安定であること、文化的にも少数派であることによって、外部環境を変化させることが困難であるという現状がある。

「状況について考えない」という回避型の対処方略の他に、ストレス状況をポジティブな意味付けによって切り抜ける「現状の意味付け」、あるいは「出稼ぎは子供が卒業するまで」など、現在の生活が期限付きであることを意識することによって、現状への欲求・不満を制限する「時間的制限設定」、あるいは「送金」という来日目標の達成にのみコミットメントを強め、生活環境や労働条件、人間関係など生活の他の側面に重要性をおかない「最も重要な目標へのコミットメント強化」といったものがみられた。これらに加え、「宗教的価値基準の利用」という、対象者の文化的特性を反映した方略が見られ、「お祈りをして、戒律を守っているから何が起こってもそれは神のくれたもの」「神に相談しているから神に従う」というように、イスラム教へのコミットによって精神的な安定を得たり、状況を解釈したりすることで、ストレスへの対処を行っていた。

このようなストレスサッサー、対処方略は、対象者の属性一特に滞在形態によってさらに細かく特徴が見られた。従って、次節ではそれぞれの滞在形態の中から典型的な事例を取り上げ、事例に検討を加えつつそれぞれの特徴について記述する。

C 滞在形態によるストレス対処の特徴

滞在形態の異なる4名の対象者の、それぞれの属性と面接で得られたストレス領域との概略を表4に示す。滞在期間は、秋山（1998）、箕浦（1984）らが心理

的变化が生じる一つの区切りと指摘しており、また本研究においても言語習得が一通り終了する傾向があった「滞在5年」によって短期滞者（5年未満）・長期滞者（5年以上）に区別した。56名中短期滞在者は17名、長期滞在者は39名であった。

以下では、4つのケースを比較しながら、それぞれのストレス対処の特徴について述べていく。

1. Mさん（出稼ぎ型・短期滞在者）

現在の生活に関して、Mさんは次のように述べている。

・・・サウジアラビアには沢山のパキスタン人が住んでいたし、文化も余り違わないが日本には言葉の問題がある。電車の行き先もわからない。でも、日本はサウジアラビアよりもお金が稼げるから。ここで充分にお金が稼げれば子どもが良い教育を受けることができる。・・・

Mさんは、ほとんど日本語が理解できず、同国人と同居し、言葉を比較的の必要としない肉体労働に従事して生活をしている。日本社会での日常生活は活動範囲が限定された非常に不便なものであるが、それによって得られる経済的効果が、Mさんが滞在を意味あるものと捉えることを可能にしている。経済的側面の重視は、一方では、「仕送りできなければ家族が困る」という強いストレス源にもなっており、現在失業中のMさんにとっては致命的な問題となっている。Mさんは、「子どもが卒業するまで」滞在を続ける予定であり、このように明確な

滞在期限を設定していることが、Mさんが現在の困難を期限付きのものとなし、耐えることを可能にしている一方略であると思われる。

又、Mさんは宗教について次のように語っている。

・・・私はすべて神の掟に従っており、飲酒もしないし、一日5度のお祈りもする。神にすべてをささげている。何かが起こっても、それは神が与えたものだから、受ける積もり。家に帰った時はいつもとても疲れていますが、神に祈った後は完全にリラックスした気分になる。・・・

日本社会との実質的な接触の少ないMさんにとって、イスラム教徒であることで日本社会との間に文化的葛藤が生じることはなく、国でのあり方をそのまま維持し、戒律を守ることによってストレスへの対処を行うことが可能であると言える。

2. Hさん（進路模索型・短期滞在者）

Hさんは、日本語能力はかなり高く、数ヶ月前に念願の就労ビザを取得し、日本の会社で仕事を始めたが、現状について次のように述べている。

・・・今就職した会社は技術的にもものすごく高くて、良い会社。でも漢字があるから、仕事を全部覚えられない。漢字なければ、誰にも負けない。

見てわかって私にとっては簡単なことでも、実際は漢字がわからずにコンピューターが使えないからできない。・・・

Mさんにとっては日本もサウジアラビアも「労働の

来日動機 滞在期間	出稼ぎ型	進路模索型
短期滞在者 (5年未満)	Mさん パキスタン出身・既婚・42才・滞在32ヶ月 <u>言語・経済</u> 来日前はサウジアラビアで出稼ぎ。「子どもに教育を受けさせるため」に、貨幣価値の高い日本へ・日本語はほとんど話せない・現在アパートに同国人と同居・2ヶ月前から失業中	Hさん バングラデシュ出身・独身・29才・滞在50ヶ月 <u>言語・文化様式・人間関係</u> 母国で大学終了後、ビジネスの勉強目的で来日・日本語学校在籍後、大学進学を諦めコンピューターの専門学校へ・日本語会話、ひらがなの読み書きに不自由はないが漢字が苦手・半年前に日本のコンピューター関係の会社に就職
長期滞在者 (5年以上)	Nさん バングラデシュ出身・既婚・37才・滞在120ヶ月 <u>経済</u> 来日前は警察官・大家族の生活を養えず「家族の生活のため」に来日・現在日本語の会話には不自由なし・8年間同じ会社で働いており、その間一度も仕事を休んだことがない・10年間一度も帰国していない	Aさん イラン出身・独身・32才・滞在94ヶ月 <u>文化様式・偏見差別・目標将来計画・所属感・結婚・ビザ制度</u> 来日前は絨毯職人とお店の店主でたくさんの従業員を抱えていた・日本で商売をした友人から日本の噂を聞き、ビジネスチャンスを探りに来日・数ヶ月の滞在予定がのびのびになり現在に至る

表4 事例の概要

場」として以上の意味を持たず、言語能力は日常の不便以上には問題にならなかったのに対して、Hさんにとっては「日本」で「日本の会社」で「日本人同様」に仕事をこなす必要があり、言語の持つ意味は異なっている。また、日本社会や日本人との関係も、Mさんとは大きく異なる。

・・・日本に来てから、外国人だから、日本から色々なことを教えてもらいたいから、私の目から見る日本人の良いところは教えてもらっている。向こうでは自分のどこが悪いかわからなかったけど日本に来てから日本人の性格を見ているから悪いことが見えてきた。……

と述べているように、Hさんは日本社会との関係形成に積極的に、日本的価値や文化的規範を経験し、それを取り入れながら生活をしていることがうかがえる。このようにより深く日本社会に関わり、さらに日本的な価値観や規範を取り込もうとする場合、

・・・日本人の性格とか考え方と自分の考え方があっていないときでも、日本人と一緒に仕事したりとか話したりとか我慢してやらなくてはいけない。……

というように、もともとの自分の文化的あり方との間に葛藤が生じてくる。多くの場合は日本人に合わせて行動をしなくてはならないHさんは、そうした葛藤状況について次のように対処している。

・・・日本に来て一番習ったのは‘がまん’。私は国では全く我慢はできなかった。そういう意味で外国に来たのはよかったと思う。いい経験になる。……

ストレスをもたらす状況を、「我慢」を身につけさせてくれた「いい経験」と読み替え、意味を与えることによって、葛藤を低減させようとしていると言える。

このように、短期滞在者であるMさん、Hさんは、共に言語力不足からくるストレスを感じてはいるが、その内容には差が見られ、またそれ以外の実際の生活状況・意識も大きく異なっている。Mさんは「出稼ぎの経済的効果」、Hさんは「経験」を用いた意味づけでストレス対処にのぞんでおり、それぞれが重視するものがストレスの内容にも、それへの対処の仕方にも反映されていたと言える。

3. Nさん（出稼ぎ型・長期滞在者）

Nさんは家族の生活を支えるために来日し、10年が経過している。その間一度も帰国しておらず家族の生活が出稼ぎに依存しており、今後の帰国の目処もたっていない。

・・・10年間で働いて、一日も休まなかった。風邪とか雨降りとかいろいろあるが、私が休むとお金入らないか

ら。……

という生活状況には、相当のストレスが想定されるが、実際には経済状況に関する事以外には現在のストレスは語られなかった。

これは、現実には困難が存在しないからというより、むしろ、Nさんが対処方略を有効に利用してストレス対処をしているからであると考えられる。それはNさんの次のような言葉に示されている。

・・・家族のためにはどんな大変なことででも我慢できる。私はそういう人間だ。私の一番の喜びは、兄弟達がいっしょにいい生活になることで、私が一人大変だったら後6、7人いいことになったら、私死んでもかまわない。……

Nさんは、10年間を通じて現在に至るまで、強烈に母国での「父親」「家長」としての役割意識を維持しており、それによって自らを支え、自らの苦勞の意味を見いだしているのがわかる。Nさんにとって、「私はそういう人間だ」というように、家族のための自己犠牲的な出稼ぎは、自らの存在意義であり、自己概念の一部であり、自尊心を支えるものであるといえる。

10年間の滞在で、日本語でのコミュニケーションには困難を感じないNさんであるが、日本社会との接触は職場以外ではほとんどなく、又関心もない。滞在目的や経済的効果の重視、意味付けの枠組みなどは、短期滞在者であったMさんと比較して、ほとんど変化がみられない。

一方、Nさん同様に長期滞在者であるAさんには、Nさんとは大きく異なった特徴が見られた。

4. Aさん（進路模索型・長期滞在者）

Aさんは、もともと日本でのビジネスの可能性をリサーチするために来日したが、そのまま友達に誘われて「交通費を稼ぐまで」のつもりで仕事を始め、結局帰国の機を逃して現在に至ったという。現在の心境について以下のように述べている。

・・・私も本当に目的がなくなっている。目的あれば頑張る。でも目的なければ、仕事もしたくないし、元気でてこないし。明日何をするかわからない。いつ帰るかかわからない。明日帰るか、来年帰るか、ここで結婚するか、どうするか全然わからない。……

日本で8年余りを過ごした後、目的の喪失、将来展望の拡散に苦しみ、さらに「今まで日本にいて成功していないと思っているから帰ってない。8年間の意味がない」と滞在の意義を見いだすことができなくなっている状態がうかがえる。さらに

・・・あんまり考えないこと。多分それでもいいんじゃない

ない。目的がないから考えない。だから No problem になってしまう。……

というように、Aさんが「考えること」をやめ、回避する以外に対処方略を見いだせずにいることがわかる。このような状況をさらに困難にするのは、ビザの問題である。

……もしビザがあればいろいろ考える。日本語勉強して、字が読めるようになりたいけど、ビザがないから読んでもしょうがない。仕事をして成功してもしょうがない。頭の中はビジネスのことがたっぷり入っているし、ビジネスしたら日本で成功する自信もっている。でも成功しても意味ない。明日捕まるかもしれないから。ビザの問題が入ると、全部あきらめてしまう。……

たとえ滞在が長期に渡り生活の基盤ができていても、滞在資格を持たないAさんの日本での生活は、明日終わるかもしれない不安定なものである。位置づけの中途半端さ、将来の見通しのなさが、目的を持って日本の生活にコミットし、自らの生きる方向を決めていくことを困難にしているといえる。こうした位置づけの不安定さは、所属感の問題も生んでおり、好物は「みそ汁とシソジュース」であり、「日本人みたいになっているよ」と語りながらも、

……イラン人と聞くと日本人の態度はぱっと変わる。一人が悪いこととしてニュースにでると、みんなもそうゆうふうに見られる……

というように、日本社会から受ける偏見・差別はAさんと日本社会との関係も不安定なものにしている。さらに

……最初の半年から1年の間に帰った人たちは全然平気だけど、長く（日本に）いて帰ったら、向こうの生活に慣れるのは大変……

というように、滞在が長引くにつれ母国との関係もまた不安定なものとなっていく、安心して所属できる場所を喪失していくことになる。

そうした状況の中で「このままでは人生がなくなってしまう」と今後に対する強い不安が生まれ、後にも先にも進めず立ち往生することになってしまう。

Aさんのように、制度的な支えを得ないままに滞在が長期化した場合、自らの人生の決定が困難になり、アイデンティティの拡散状態ともいえるような状況に陥っていく場合が考えられる。

D まとめと考察

本研究の対象者達には、言語領域や文化的差異、経済的領域など、これまでの異文化適応研究で明らかにされ

てきたような事柄と同時に、滞在資格の不安定さから来るストレス、さらに滞在が長期化していることに付随する様々なアイデンティティ領域におけるストレスが見られた。

新しい社会との関係や物事の評価枠組みは、個々人の目的を反映したものであるといえ、出稼ぎ型のMさんとNさんは日本社会との関係形成への関心が低く、従って、日本社会との関係がストレスサーとして意識されることも少なかった。日本を「出稼ぎの場」としてのみ捉え、「労働」という行為に終始した生活を送っている点は、滞在期間に関わらず共通してみられ、出稼ぎ型の滞在者が社会的・文化的存在としてはほとんど変化しないまま滞在を続けていることがわかる。

一方で、日本社会との関わりに積極的な態度を示す進路模索型のHさん、Aさんは実際に関係も深まるが、その反面文化様式や偏見、差別などの、日本社会との接触重視に起因するストレスにもさらされていた。また、長期滞在者であるAさんのほうは、Hさんにはみられなかった目標の喪失や所属感の揺らぎなど、アイデンティティと深く関わったストレスが生じており、さらにそれに対して有効な対処方略が見出せない状態が見られた。

異文化接触においては、現実的、客観的事実として存在する様々な困難状況の中で、個々人の動機や目標にとって重要である事柄のみが選択的に意識化され、それに対する対処が試みられると言える。さらに、時間の経過とともに、現実を解釈する個々人、個人が形成している社会との関係にも変化が生じ、個々人にとっての重要な事柄も変化すると言える。

Ⅳ 今後の課題

外国人就労者の来日は、「外国人労働者」という外的に与えられたカテゴリーからは、貨幣価値の高い国へと異動する労働力のフローとしてしか理解されない。しかしながらそれは対象者本人の言葉で語られることにより、様々な意味を持つものとして現れてくる。

対象者の中で、アイデンティティに関わる領域にストレスが生じている進路模索型の長期滞在者は、いわゆる「定住化」が指摘されている層を構成する人々であり、今後も日本にとどまる可能性のある人々である。滞在の長期化がどのようなプロセスの中で、アイデンティティに危機的な状況をもたらすのか、また今後どのように変化していくのか、さらに詳しく研究を進める必要があるだろう。

また、本論においては典型例についてのみ述べたが、

こうした状況下においても、ストレスに有効に対処している人々がいた。こうしたケースについて、いかにそれが可能であるのかを検討することも重要であるといえよう。

グローバル化する社会の中で、日本社会は今後さらに多様化への対応を求められる。限られた社会階層出身の、明確な目的を持って、一定期間来日する留学生やビジネスマンに加え、様々な背景・目的を持つ人を社会の一員として迎える必要性が生じる。

こうした時代を迎えて、さらに多様な異文化接触のカタチが生まれ、その多様性を理解しうる、文脈に対して柔軟な研究枠組みを見出すことが今度の研究課題となるだろう。

註

- 1) 本編では「外国人就労者」とする。
- 2) 90年に入国管理法が改正され、「不法就労者」対策として雇業者罰則規定が新設された一方で、日系人に関しては就労の規定が緩和された(入管協会, 1994)。
- 3) 98年現在、バングラデシュ人5581名、パキスタン人4688名、イラン人9186名の不法残留者がいると見られている。
- 4) 1987年に設立のボランティア団体。のべ2000人以上の外国籍会員が登録。毎週一度の相談活動を中心に外国籍スタッフ、日本人スタッフが運営に携わる。年間1000件以上の相談を行っており、相談に訪れる人の大部分は滞在資格を持たない「超過滞在者」である。
- 5) 男性の大学・カレッジなどの在学率はバングラデシュ7.3% (1990)、パキスタン3.7% (1989)、イラン17% (1994) (ユネスコ, 1997)であることを考慮すると、本研究の対象者は出身社会において高学歴層であると言える。

引用文献

- 秋山剛 1998 異文化とメンタルヘルス：異文化間メンタルヘルスの現在 心の科学, 77, 14-22.
- Berry, J. W. 1990 Psychology of acculturation: Understanding individuals moving between cultures. In R. W. Brislin (Ed.) Applied cross-cultural psychology. London: Sage
- Berry, J. W. 1997 Immigration, acculturation and adaptation. Applied Psychology: An International Review, 46, 5-68.
- Bochner, S. 1982 Culture in Contact. Pergamon Press
- Brislin, R. W. 1986 The Working and Transliteration of Research Instrument In W. J. Lonner & J. W. Berry (ed.) Field Methods in Cross-cultural Research. Sage
- Church, A. T. 1982 Sojourner Adjustment. Psychological Bulletin, 91, 540-572.
- Furnham, A., & Bochner, S. 1986 Culture Shock: Psychological reaction to unfamiliar environment. Methuen.
- Glaser, B. G., & Strauss, Anselm, L. 1967 the Discovery of Grounded Theory: Strategies for gualitatieu research. Aldine de Gruyter.
- 井上晶子 1998 外国人労働者のメンタルヘルスと相互援助活動 井上孝代(編) 多文化時代のカウンセリング 現代のエスプ

- リ, 377, 179-187. 至文堂
- 片桐 隆 1997 質的調査の技法 北澤毅・古賀正義(編)〈社会〉を読み解く技法—質的調査法への招待
- 木村真理子 1997 文化変容ストレスとソーシャルサポート 多文化社会カナダの日系女性たち 東海大学出版会
- 駒井 洋(監修) 筑波大学社会学研究室 1991 在日イラン人
- 駒井 洋 1995 講座外国人定住問題 第2巻 定住化する外国人 明石書店
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 Stress, Appraisal, and Coping. (本明寛・春木豊・織田正美監訳 1991 ストレスの心理学—認知的評価と対処 実務教育出版)
- 箕浦康子 1984 子供の異文化体験—人格形成過程の心理人類学的研究 思索社
- 野田文隆 1994 多文化社会とマイノリティー移住者・難民のメンタルヘルス 臨床精神医学 23, 7, 697-705.
- 来日外国人との共生社会研究会(編) 1994 来日アジア・アフリカ系外国人の生活適応と日本人との共生に関する研究
- 齊藤幸二 1996 異文化体験の心理学—青年文化から異文化体験まで 川島書店
- Short, K. H., & Johnston, C. 1997 Stress, Maternal Distress, and Children's Adjustment Following Immigration: The Buffering Role of Social Support. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 65, 3, 494-503.
- Smith, E. J. 1985 Ethnic minorities: Life stress, social support, and mental health The counseling psychologist, 13, 537-579.
- Smith, J.A., Harre, R., & Langenhove, L. V. 1995 Rethinking Methods in Psychology. Sage.
- 杉山章子・大西守・森山成彬・江畑敬介 1994 外国人精神障害者の受診実態—全国医療機関へのアンケート調査から 臨床精神医学 32, 11, 1323-1329.
- 杉山章子・大西守 1995 在日外国人のメンタルヘルス 現代のエスプリ, 335, 104-115. 至文堂
- 鈴木 一代 1997 異文化遭遇の心理学—文化・社会の中の間人, プレイン出版
- 入管協会 1994 特集不法就労防止のために 国際人流 893—35 財団法人入国管理協会
- 田中共子・藤原武弘 1992 在日外国人留学生の対人行動上の困難—異文化適応を促進するための日本のソーシャルスキルの検討—社会心理学研究, 7, 92-101.
- Ward, C., & Searle, W. 1991 The impact of value discrepancies and cultural identity on psychological and sociocultural adjustment of sojourners. International Journal of Intercultural Relations, 15, 209-225.
- Ward, C., & Kennedy, A. 1993 Where's the 'culture' in cross-cultural transition? Journal of Cross-cultural Psychology, 24, 2, 221-249.
- Ward, C. 1997 Culture Learning, Acculturative Stress, and Psychopathology Three Perspectives on Acculturation Applied psychology, 46, 1, 58-61.

謝辞

本稿は、1998年度東京大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。修士論文執筆にあたりご指導頂きました下山晴彦指導教官に深く感謝いたします。

結果の分析に関して、東京大学大学院、菅沼真樹さん、塙朋子さん、宇留田麗さん、杉浦義典さん、奥地資

子さんにご協力頂きました。

そして、貴重な時間を割いて快く面接に応じて下さった皆さん、研究の場を与えて下さった皆さんに心から感謝いたします。